

“トロイの木馬”にはトロイの豚 料理にみる古代ローマの世界意識

紀元前二八四年ごろ、絶世の美女ヘレンの争奪をめぐる、当時のヨーロッパ圏を総動員して行われたのがかの有名な“トロイ戦役”——“トロイのヘレン”というタイトルで映画化されたこともあり、有名な“トロイの木馬”の故事を残した。

この戦いは十年もの長期にわたったが、この間トロイは執のようなギリシャ軍の包囲によく耐えた。が、それがついに陥落したのは、ギリシャ軍が城門の高さよりもっと大きな木馬をつくり、その中に多数の兵士をひそませ、シノーンという「裏切者」に仕立てた男にトロイ王をだまさせ、木馬を城内に引き入れることに成功したためだった。トロイ側では木馬があまりに大きすぎたため、城門だけでなく城壁までもこわさなければならず、これがあとまでも残る痛恨事になったといわれる。

——というわけで、このトロイの木馬をもじった豚の丸焼き料理が“トロイの豚”。イタリヤはローマの古代料理で、妊娠したメス豚の生殖器の料理もあるくらいだから、豚の丸焼きぐらいはそれこそ序の口だった。ただし、それをただの豚の丸焼きといわず、トロイの故事と結びつけたところがローマの“世界意識”を感じさせるのである。

料理そのものは、ネーミングのうまさにくらべるとそれほどものではないが、豚の



腹に、兵士ならぬ各種の肉類、ハム、ソーセージ、野菜などの詰めものをして、丸焼きにしたもので、これを食べながらトロイ戦役の長々とした物語を思い出すには十分なボリューム。ついでに言えば、ローマに先立つギリシャ時代には、エジプトや東方の諸国が宗教上のタブーから豚肉を口にできなかったのにたいして、地中海諸国の中でまっさきに豚肉を口にし、かつ大いに食べたことが特筆される。そればかりか、ギリシャの哲学者のなかには、哲学と思索に明けられるかたわら、養豚についての技術書をあらわした

ご仁もあるくらいだから、ギリシャ哲学のすぐれた精華は、あるいは豚肉に負うところが大きかったのかも知れない。ギリシャ時代のチーズ料理に「トリオン」というのがある。オートミール、卵黄、干しぶどう、アーモンド、はちみつ、バター、チーズのほか、豚の脳みそを用いたものだが、これを見ても、雄渾な頭脳は肉食からという気がしてくるのである。